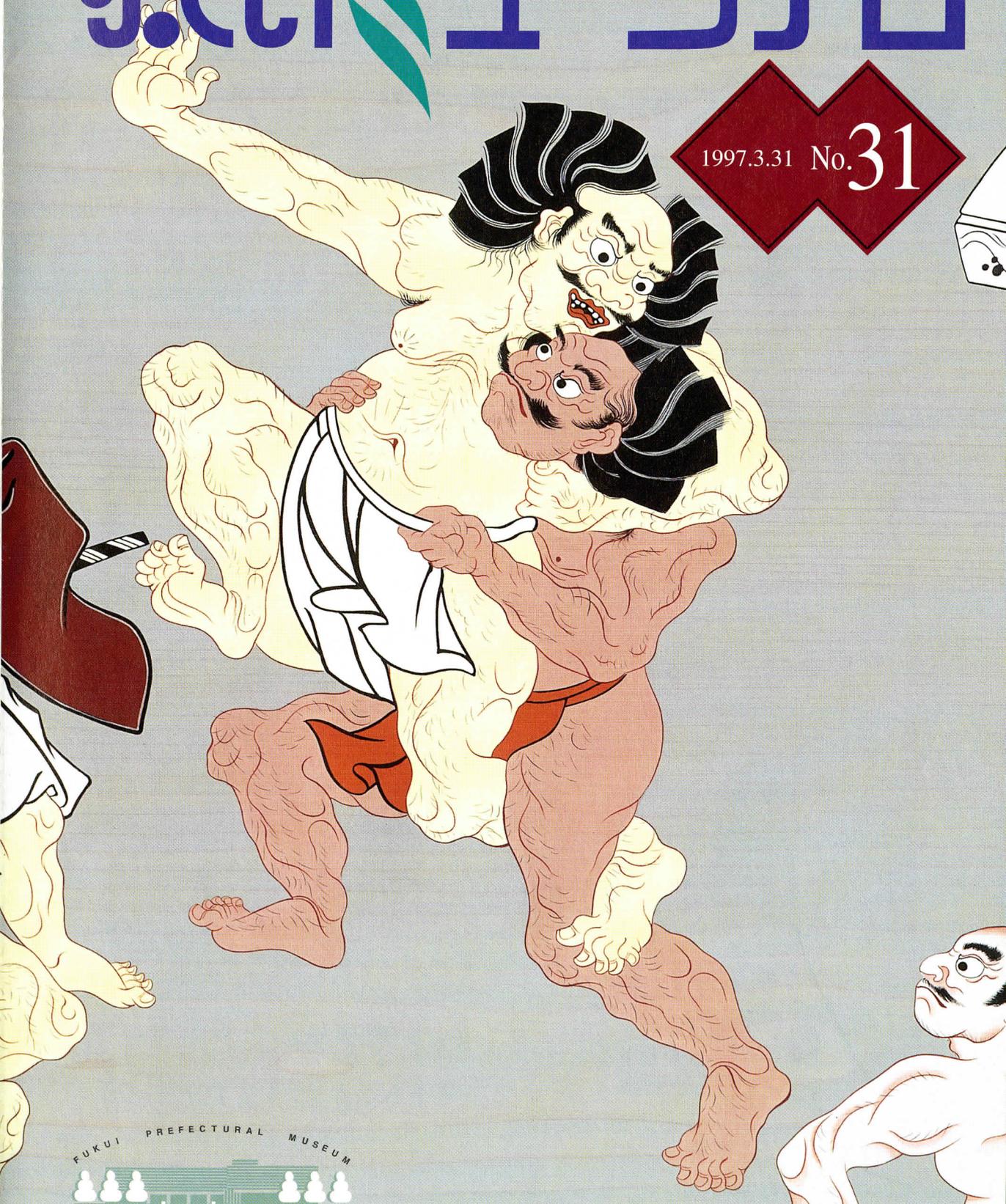


ふくいのユーゴアム

1997.3.31 No. 31



FUKUI PREFECTURAL MUSEUM



企画展紹介

福井県・浙江省友好提携5周年記念特別展

「波濤をこえた文化交流」

～中国浙江省の文物展～

九州から南南西へ1,000キロあまり、東シナ海に面して中国浙江省はあります。杭州や紹興など風光明媚な観光地をかかえ、今や日本のみならず世界各国から観光客が訪れています。また、近年の改革開放政策により経済発展が著しく、日本企業の進出も行われようとしています。

しかし、浙江省と日本との交流は近年に始まったものではありません。記録に残るところでは、長安をめざす遣唐使がしばしば上陸地としていますし、天台宗の開祖最澄が修行したのもこの地です。また、宋代以降(960年～)になると、陶磁器や銅銭を積んだ貿易船が日本へと出帆していきました。浙江省は、まさに日本への海の窓口でした。

今回の特別展では、福井県と浙江省の友好提携5周年を記念し、浙江省博物館の所蔵資料を借用展示します。その際、日本と中国の交流を物語る資料をおもに選び、7つのコーナーを設けました。また、これに関連すると思われる日本国内の資料も展示します。これによって、浙江省の歴史・文化や、日本と中国の長い交流の歩みを理解することができればと思います。



浙江省博物館（中国浙江省杭州市）

コーナー紹介

1. コメ

浙江省には、東アジア最古ともいわれる稲作農耕文化「河姆渡文化」(前5,000年ころ)の存在が確認されています。その名前の由来となった河姆渡遺跡は低湿地にあり、通常なら残らない木器や骨角器が多く出土しています。また漆が塗料として使われていたこと、原始機による紡織が行われていたこと、高度な木工技術をもっていたこ

などがわかっています。これらの内容は次の良渚文化(前3,300年ころ)に引き継がれ、より発達していきます。

紀元前4世紀ごろ、朝鮮半島から北部九州に伝えられた稲作農耕文化のルーツはこの浙江省にあるとも考えられています。

2. 玉器

中国では、半透明で堅く美しい石「玉」が古くから珍重され、さまざまな器物に利用されてきました。河姆渡文化期ではアクセサリーに少量使われる程度でしたが、良渚文化期に入ると質・量ともに飛躍的に向上します。良渚文化期の人びとは、これらを宗教的な祭儀に使用したり、有力者の墓に副葬したりしています。これら玉製品の形態や紋様のいくつかは、後代の玉器や青銅器に受け継がれるようです。

日本の縄文前期に使われたアクセサリーである玦状耳飾りは、当時の中国の玉玦に似ています。そこに両者の交流が見られるとの見解もあります。

3. 銅鏡

浙江省は、漢代(前202～後220年)になると銅の産地として有名になります。ここで産出した銅は、銅鏡や銅銭の素材として使われました。

この時代、日本列島に生まれた諸政治勢力は、中国へ朝貢したみかえりのひとつとして青銅鏡を持ち帰りました。これらは権威のシンボル、あるいは呪術的な器物として扱われ、墓に副葬されました。

また、唐代以降(618年～)も遣唐使などの手をへて青銅鏡が流入しましたが、とくに宋代(960～1279年)に浙江省で製作された湖州鏡は、このころ盛んになった日宋貿易の交易品として日本列島に多くもたらされました。

4. 陶磁器

中国の陶磁器の歴史は古く、漢代には浙江省で本格的な磁器(越窯)の生産が始まりました。唐代(618～907年)になると、遣唐使やその他の交易ルートによって中国製陶磁器が日本へもたらされるようになります。とくに宋代からその量が飛躍的に増え、陶磁器は日本への輸出品の中心を占めるようになりました。

浙江省は、越窯から龍泉窯へと続く青磁の大産地であ

白亜紀の日本には
サンゴ礁が広がっていたのか？

佐野 晋一

会期：97年10月4日▶11月16日

り、さらに寧波という対外貿易の拠点港をかかえ、たいへん繁栄しました。

日本での磁器生産は、近世初期に、肥前有田で朝鮮人陶工によって始められるのを待たなければなりません。

5. 貨幣

中国の貨幣の歴史は古く、殷周代(前1,700~770年)にまでさかのぼるものもあるといわれています。また、中国では金貨や紙幣も使われましたが、中心を占めるのは常に銅銭でした。

漢代以降、中国の銅銭がさまざまなルートで日本へもたらされましたが、唐代までその量は限られ、まだ貨幣として流通しているわけではありませんでした。しかし宋代以降、日本で国家による貨幣鑄造が行われなくなると、中国の銅銭が大量に輸入されるようになりました。これは再び貨幣鑄造が始まる近世初期まで続きます。

6. 絹織物

浙江省は唐代以降、絹織物産地としても有名になります。明・清代(1402~1912年)には、杭州に織造府という役所が置かれ、国家の管理下にその生産が行われました。

ここでは、清代の絹織物といわれる「蝦夷錦」を展示します。蝦夷錦とは、北海道アイヌとの交易により本土にもたらされた中国製織物の総称です。これは、もともと清朝政府が北方民族に下賜したもので、それが交易により北海道さらに日本本土へと運ばれてきたものです。日本と中国との間には、長崎を窓口とする正規ルートとは別に、北方からの交易ルートも存在していたのです。

7. 道元

曹洞宗の開祖道元は、貞応2年(1223)浙江省に渡り、天童山などで修行を行いました。ここで如浄に師事し悟りを得た彼は、帰国後京都建仁寺などに住み、「普勧坐禅儀」「正法眼蔵」などを著します。やがて寛元元年(1243)、彼は越前志比庄地頭の波多野義重などの招請を受け、越前に移り永平寺を創建しました。

ここでは、道元ゆかりの資料を展示します。

(中原 義史)

日本の恐竜について書かれた本を読んでいると、「白亜紀の海にはサンゴ礁が広がっていた」という文章を見かけることがあります。サンゴ礁というと、暖かくきれいな海が思い出されますが、一億年以上も前のことについて、どうしてサンゴ礁があったとわかるのでしょうか。サンゴ礁というと、色とりどりの魚やおもしろい形をしたサンゴなどが思い浮かびますが、地質学の立場では、石灰質の骨格を持った造礁生物が集まってできた石灰岩が想像されるのです。白亜紀前期には、造礁性サンゴの他、オルビトリナなどの大型有孔虫、厚歯二枚貝、ネリネアなどの厚殻の巻貝、石灰藻などといった特徴的な化石を産する石灰岩が、熱帯地方を中心に世界各地に発達していました。

日本においても、白亜紀前期の造礁生物化石が各地から知られています(図1)。多くの地点においては石灰岩は見つかっておらず、造礁生物化石単独での産出地も示してあります。ここでは、まず非常に保存の良い化石を産することで知られる宮古層群について取り上げます。宮古層群は、主として砂岩や泥岩からなる、浅い海で堆積した地層で、岩手県北部陸中海岸の宮古市から下閉伊郡田野畑村にかけての海岸沿いに分布しています。保存の良いアンモナイトや二枚貝、巻貝などのほか、大型有

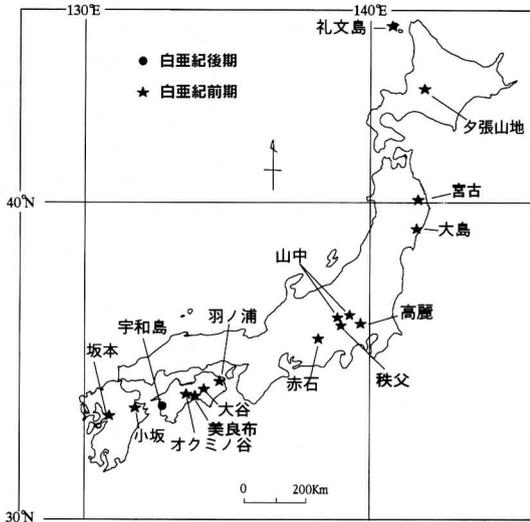


図1 日本における造礁生物化石産地

孔虫オルビトリナや造礁性サンゴ、厚歯二枚貝（巻貝やサンゴのような、非常に変わった形をした二枚貝）、石灰藻などの礁形成に関係する生物の化石もたくさん含まれています。二枚貝や巻貝については熱帯海域の貝類との類似性が指摘されており、また、熱帯地域の潮間帯で形成されるビーチロックも発見されるなど、熱帯・亜熱帯環境が指示されています。

ところが、サンゴや厚歯二枚貝の化石は、期待される礁性石灰岩ではなく、礫岩や砂岩中に産することが多いのです。宮古層群の基盤を作る岩石の礫に混じって、群体サンゴや厚歯二枚貝の破片が含まれています(図2)。石灰岩は、わずか数か所において、サンゴや厚歯二枚貝、石灰藻などの造礁生物がお互いに積み重なって構成しているものが確認されているに過ぎません。厚さも、数十cmからせいぜい2m程の小規模なものです。これらの造礁生物は、硬い基盤の上に小さな群落を作っていたものと考えられます。生物礁と言えるような、規模の大きな石灰岩の存在が確認されていないため、礁の有無についての論争が続いています。礁の存在を推定する立場からは、現在地層として観察できない、



図2 宮古層群における造礁生物化石の産状の例 (若手県下関伊野畑村平賀北岸)

より沖合で形成された部分に礁の存在を考えたり、礁の存在を否定する立場からは、造礁生物が礁を作ることができるほど水温が高くなかったのではないかと推定したりしています。宮古層群の小規模な石灰岩は基盤の硬い岩石上に形成されており、石灰質砂岩や礫岩に覆われている上、陸から供給された砂や礫を大量に含んでいます。これらの観察結果と、熱帯・亜熱帯環境を示す化石と堆積の情報から、「生物礁形成が十分可能なほどに暖かかったものの、どんどん陸から土砂が供給される環境のため、造礁サンゴや厚歯二枚貝からなる群落は岩礁にできても、すぐに埋められてしまっ、立派なサンゴ礁の形成にまでは至らない。これらの群落から、壊された造礁生物の破片が周囲に流され、砂岩や礫岩中に発見される。宮古層群と基盤との境界はほとんど観察されないため、石灰岩が形成されていたとしてもほとんど見つからない。」という、別なシナリオも考えられるのではないのでしょうか。日本においては、白亜紀以降、造礁生物の破片が多数見つかっても、礁性石灰岩が見つからない例が各地で知られています。このような場合にも、礁の存在を最初から否定するのではなく、宮古層群と同じような小規模な石灰岩が形成された可能性はないかを検討してみる必要があると思われる。

続いて、日本の白亜紀前期の石灰岩のうち、最も大規模なものである、北海道の夕張山地北部の例について述べます。大きなものでは厚さ数十m、長さ数百mに及ぶ石灰岩のブロックが、南北30km以上にわたって、化石に乏しい泥岩や砂岩泥岩互層中に点在しています。地層が垂直に立っており、石灰岩が周囲の岩石よりも風化に強いため、尾根沿いに石灰岩が突き出している、日本離れした風景が見られるところもあります(図3)。石灰



図3 下部蝦夷層群における石灰岩の産状の例 (北海道空知支庁芦別市雌山)

岩が泥岩中にブロックとして取り込まれているため、石灰岩はその場で堆積したものではなく、より浅い場所で形成されたものが壊され、深海に移動したものと考えられています。ところで、日本を代表する石灰岩地帯、例えば、鍾乳洞やカルスト地形で有名な山口県秋吉台地域や福岡県平尾台地域などのサンゴ礁石灰岩は、熱帯の海洋島で形成されたサンゴ礁が、プレートの移動により北に運ばれ、海溝でプレートが沈み込む

ときに陸側に付け加わったものだと考えられています。この夕張山地の石灰岩についても、熱帯海域で形成されたサンゴ礁が海溝で陸側に付加したのではないかという疑問がわいてきます。しかし、石灰岩と周囲の地層の堆積した年代がほぼ一致すること、石灰岩自体に陸から運ばれてきた岩石の礫が大量に含まれていることなどから、付加した海山の破片であるとは考えられません。石灰岩はもともと大陸に近い場所で形成されたと考えられます。

この石灰岩からも、大型有孔虫オルビトリナや造礁性サンゴ、厚歯二枚貝、ネリネア、石灰藻などの礁形成に関係する生物の化石を多産します。厚歯二枚貝もプレカプロティナやトゥーカシア、モノプレウラの仲間と、少なくとも3種類が存在し、特に分布域北部の石灰岩は厚歯二枚貝石灰岩と呼んでもおかしくないものです。ところが、宮古層群に見られるような、石灰岩体の周囲に存在したことが期待される、二枚貝や巻貝、アンモナイトを含む地層のブロックがほとんど見つからないのです。わずかに1地点で、サンゴや巻貝の破片を含む石灰質砂岩や、浅海性二枚貝と考えられる化石片を含む砂岩を見出しているのみです。これは夕張山地の石灰岩を考える際の大きな謎となっており、もしかすると環境復元の一つの鍵を握っているのかもしれない。石灰岩の中には、波が砕けるような場所から静穏なラグーンまでの多様な環境を示す岩相が認められています。移動した石灰岩ブロックからもとの岩体を復元することはかなり困難な仕事です。ピースの大部分が欠けてしまったジグソーパズルを組み立てるようなものです。しかし、石灰岩ブロックに認められる岩相を認識して組み合わせることで、少しずつですが、どのような礁性石灰岩が形成されていたかが明らかになりつつあります。驚くべきことに、化石の種類や石灰岩の岩相は、大陸地域の大規模な石灰岩体と類似しています。もしかすると、大陸地域で形成された石灰岩に比較できるようなものが存在していたのかもしれない。

白亜紀は温暖で海水準も高く、大陸地域には非常に大きな石灰岩体が形成されていました。中には、厚さ数百m、長さ百kmに及ぶものすらあります。これらに比べると、日本の礁性石灰岩は本当にちっぽけなものです。果たしてこんなものを研究する意義があるのでしょうか。白亜紀の礁性石灰岩や造礁生物化石の研究は地中海・中東地域とカリブ海地域を中心に進んできました。この当時は、まだ大西洋は現在のように大きく開いていませんから、二つの地域はかなり近い場所ということになります。太平洋地域は研究の広大な空白域になっていたのです。日本における造礁生物化石の研究があまり知られていないため、日本周辺はサンゴ礁が発達しにくい地域という区分をされてしまったことさえあります。最近、北西太平洋の沈水した海山の頂部から採集された礁性石灰岩や造礁生物化石の研究が盛んに行われ始めています。フィリピンからも厚歯二枚貝石灰岩の存在が報告

されました。ようやく、太平洋地域においても、当時の白亜紀の造礁生物相研究が進み始めたのです。日本の造礁生物化石も、北西太平洋域の情報を与えてくれるものとして注目を集めています。造礁生物の中には、カリブ海地域から、海流の関係で太平洋を越えて、中東に広がっていったと考えられるものもいます。太平洋域の造礁生物相はカリブ海地域のものに近いのか、地中海・中東地域のものに近いのか、それとも独自の生物相を有しているのかが、今後の大きな研究テーマとなっています。

白亜紀は非常に長い時代です。白亜紀前期だけでも約5,000万年の長さがあります。恐竜の絶滅が約6,500万年前で、それから現在に至るまでの環境変化を考えると、白亜紀前期の間にも、生物にも地球環境にも様々な変化があったとしても不思議ではありません。昔の暖流の影響の及ぶ範囲を考えると、造礁生物化石や礁性石灰岩の分布は非常に重要な情報として取り扱われています。北半球の大洋の西側には北向きの暖流ができます。現在、黒潮の影響で、世界最北の造礁性サンゴの生息地が日本付近にあることはご存じでしょうか。この分布限界は、もし気候が今より寒ければ南に、暖かければ北に動くことでしょう。白亜紀の頃には、日本は既にユーラシア大陸縁辺の中緯度地域に位置しており、暖流の影響が及んでいたことが考えられます。白亜紀前期の間にも、日本において造礁生物化石が見つかる時期と見つからない時期があることは、温暖な時期と寒冷な時期とが存在していることを意味しているのかもしれない。すると、日本における造礁生物の消長が解明できたならば、もしかすると温暖寒冷の変化を示す基準として使える可能性が出てきます。日本の白亜紀の石灰岩は、世界の立派な石灰岩に比べれば、非常に小さな石灰岩です。造礁生物化石だって小さな破片に過ぎないのですが、白亜紀の地球環境を復元する情報を与えてくれるのかもしれない。日本の礁性石灰岩は単なる一地域の情報にすぎないかもしれませんが、地球全体を考える貴重な情報ともなるのです。

さて、結局「白亜紀の日本にはサンゴ礁が広がっていた」のでしょうか。白亜紀の日本周辺に、グレート・バリアリーフのような大きな生物礁が存在していた証拠はありませんが、海の生物の化石から見ると、白亜紀前期には、暖流の影響下の、熱帯・亜熱帯環境におかれていたことは間違いなさそうです。ここでは、日本の白亜紀前期の礁性石灰岩の研究と、「造礁生物化石が、白亜紀の日本や地球の姿について、どんなことを語ってくれるのだろうか」というテーマの、さわりだけを紹介させていただきます。いずれもまだまだ研究途上の仮説に過ぎず、今後検証して行かねばなりません。また、造礁生物化石は過去の地球を考えるほんのわずかな手がかりに過ぎません。これから、恐竜や植物などからわかる陸上の情報と、海の情報とを総合することにより、白亜紀の地球と生物の姿がよりはっきりと語れるようになることを期待して、この文を終わらせていただきます。

活動紹介

絵馬の修理と保存について

博物館では、平成5年(1993)に開催した特別展「絵馬-EMA GALLERY-」の開催を契機に、県内の寺に残る絵馬の調査を行ってきました。これまでに約1200か所、4500枚余りの絵馬を調査しました。私たちが調査した絵馬には、枠(額縁)が破損しているものや全体が割れていたり、部分だけが残っているもの、表面の絵具が剥落してしまったものが数多くありました。そこで、今回は、調査での経験をもとに、絵馬の取り扱い方や修理・保存のための簡易な方法を紹介したいと思います。

まず、絵馬の取り外し方です。ほとんどの絵馬は銅線や紐で吊り掛けてありますが、なかには柱や腰板に直接クギで打ち付けてあるものがあります。神社の改築や修理の際、これらを無理に取り外そうとすると破損してしまう恐れがあります。調査先でも、「以前にこわれて処分した」ということをよく耳にしました。このような場合は、左官用のコテ

(図1)を絵馬の裏側にさし込み、少しずつ力をかけながらがす方法があります。掛け直すときは、銅線を用いて吊る方が良いでしょう。つぎ

に、絵馬の表面に付着したホコリの除去です。絵馬に用いられた絵具は、長い年月の間に伸縮を繰り返し、たいへん剥落しやすい状態になっています。けっして布などで拭かないことです。調査中中には、表面を布で拭いたために、絵具がすべて落ちてしまった事例も少なくありませんでした。絵具が塗られていない部分だけを、筆や刷毛を用いて除去する程度にしておきます。

つぎに、絵馬の枠がはずれたり、全体が割れている場

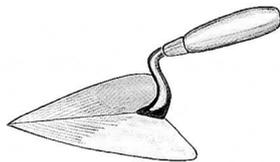


図1

合の修理法です。これには、竹釘や針釘で止め直したり、裏面に補強材をあてる方法があります。このとき、注意しなければならないのは、カナヅチなどでクギを叩かないことです。衝撃で表面の絵具が剥落するからです。大型のベンチを用いて釘を徐々にさし込むようにすると良いでしょう。さらに、修理後に掛け直す場合、若干の日数と経費はかかりますが、木箱(図2)を製作することも

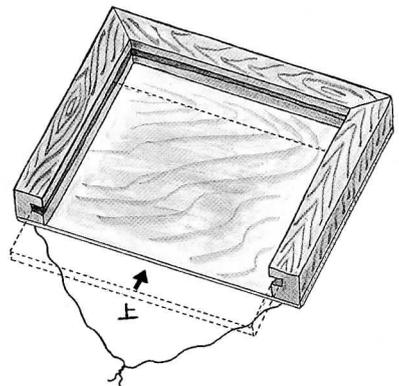


図2

おすすめします。この方法は、絵馬の周縁部全体で自重を支えるので、枠や絵馬の全体に無理な力がかからず、破損を防ぐことができます。また、この箱には絵馬を収納した背面に、固形防虫剤(ナフタリンなど)を入れる空間があり、定期的に薬剤の入れ替えをすれば、ある程度の防虫効果が得られます。

最後に、絵馬の保管場所について触れておきます。公民館や集落センターで保管したらどうかという声をよく聞きますが、環境はあまり良くありません。自然光や照明器具に照らされること、冷暖房器具で室内の温湿度が著しく変化することなど、保存にとっての悪条件が重なります。やはり、暗くて適度の湿度がある神社の建物内が適しています。

ところで、もし神社改築等で絵馬の保管に支障をきたした場合は、ぜひ博物館にご相談ください。当館では、絵馬を取り外す作業を含め、緊急措置として絵馬の寄託を受け入れています。寄託期間中には絵馬の写真撮影や燻蒸処理(殺菌殺虫)を行い、作成した絵馬の調査目録や写真などを添えて返却することを行っています。

以上、当館の絵馬調査の経験から、絵馬の取り扱い方や修理・保存の方法について述べてきました。しかし、住民の方々が自分たちの地域の歴史を伝える貴重な文化遺産として保存していくことが何より大切なことです。博物館の活動がその一助となれば幸いに思います。

友の会 会員募集

福井県立博物館友の会は、博物館開館の翌年(1985)に発足し、それ以来12年間当館のよきサポーターとして、運営を続けてもらっています。

昨年からは、会員各位の積極的参加型友の会として再出発し、会長・副会長以外に数名の幹事を置き、できる限り幹事主導による運営に切り替えつつあります。その成果の一つが、昨年春の特別展の際のミュージアムショップ開催です。幹事をはじめ、一部の会員の方にはお忙しい中、売子としてがんばっていただきました。この場を借りて、お礼申し上げます。また、任意の勉強会として、私が担当している「古文書勉強会」も5月に始まり、現在まで毎月1回続いています。

今後さらなる皆様のご努力で、福井県立博物館友の会が発展することを期待しています。そのための最低のお手伝いは、われわれ学芸員もさせていただこうと思っています。

さて、今年も新規会員募集の時期になりました。下記のような特典がありますので、皆様お誘い合わせのうえ、ふるってご入会下さい。

(友の会担当 澤 博勝)

こんな特典があります

- ・博物館と友の会の行事をもちろんご案内します。
- ・常設展示を何度でも無料で観覧できます。
(家族会員は一度に4名まで)
- ・特別展も無料(1回)で観覧できます。
(家族会員は計2名)
- ・研修旅行や見学会に参加できます。(有料)
- ・友の会会誌「Myミュージアム」をお届けします。
- ・当館広報誌「ふくいミュージアム」をお届けします。

会 費 (1年分)

一 般	2,500円
大学生・高校生	2,000円
中学生・小学生	1,000円
家 族	5,000円
賛 助 会 員	(一口)10,000円

期 間

1997年4月1日～1998年3月31日

入会方法

入会申込書(博物館にあります)にご記入のうえ会費を次のいずれかの方法で入金して下さい。

- ・直接、博物館内友の会事務局へ
- ・お近くの郵便局から郵便振替で(申込書は別送)
口座番号 金沢5-23379
加入者名 福井県立博物館友の会
- ・現金書留で博物館に郵送(申込書を同封)

◆入会手続き終了後、会員証をお渡しします。



研修旅行(滋賀県立安土城考古博物館)



研修旅行(安土城跡)

復元、江戸前期の絵馬 「相撲(赤沢山大相撲)図」



福井市上一光・白山神社
延宝4年(1676)奉納
製作:(有)シー・エス・ケー
島村正博

江戸前期、延宝4年(1676)に奉納された絵馬です。夢楽洞絵馬が出現する約一世紀ほど前の古い時期の絵馬です。嶺北地方には、これに似た種類の絵馬が数点残されています。当絵馬は、上一光の白山神社に村人十数名によって奉納されたものです。名前が幼名であることから、村の子供組が奉納したのではないかと考えられます。

画は、伊豆の赤沢山で、源頼朝を前に河津三郎と俣野五郎が相撲をとる場面です。河津が「かわづ(河津)掛け」で俣野を負かした話で知られます。『曾我物語』の仇討ちの発端となる遺恨角力の一節から取材したのですが、じつは原典では俣野が「かわづ掛け」をかけたことになっています。

画中でとくに注目されるのが、力士の髪型の描法です。太い帯線と細線を組み合わせて表現する髪型のデザインが、江戸前期に京都で出版された古浄瑠璃の正本(木版の絵入り浄瑠璃本)の挿絵にみられる画法と酷似しているのです(写真参照)。このことから、原画は京都で浄瑠璃本の挿絵を描いていた版下絵師の作でないかとも考えられます。また、実物の絵馬の表面には、下絵を描いた紙をあてて輪郭をなぞった痕跡(凹線)が残っています。同じ原画を使って、複数の作品を製作することも可能だったといえます。



「常陸坊海尊」寛文2年(1662)山本久兵衛板

さらに、画の描線がひじょうに細く、力士の肌には無数の体毛とシワが描き込まれていることにも驚かされます。少し離れて見ると分からないほど、じつに細かな線です。版画とは別に、たとえ絵馬でも肉筆画ではこうした細かい筆遣いに絵師の力量が競われたのでしょうか。

なお、実物の絵馬では黒くみえる下地には、具墨(胡粉と墨を混ぜた灰色顔料)が塗られていたと推定されます。長い歳月のうちに胡粉が流れ落ち、墨の部分が濃く見えるようになったと考えられるのです。(笠松記)